大学で育てる"中国語の通訳・翻訳"

杏林大独自の「中国語学科」が始動

通訳・翻訳養成のための「中国語学科」設立という画期的で、他に例のない試みが、ことし4月に杏林大学で始動した。独自の試みを主導するのは中国語通訳の第一人者で、協会参与の塚本慶一同大教授。コミュニケーション能力の向上を重視した学習計画に沿って、学生たちは"中国語漬け"の毎日を送っている。中国語の将来的な必要性が高まる中、「日本の人材不足」を指摘する塚本教授は、中国語分野での人材育成に向けた動きを杏林大から広げていこうと考えている。東京・八王子の杏林大を訪れ、中国語学科の授業を取材した。（北澤竜英）

中国語を教える李蕾先生。現場を知る通訳でもある。11月22日、杏林大で

コミュニケーション能力重視の学習計画

取材したのは、ことしから中国語を学び始めた学生12人のクラス。同学科の入学には中国語学習の経験は問われないため、ゼロから通訳を目指すことも可能だ。教室に入ると、講師の李蕾先生の声が響いていた。

中国語学科が進める「日中通訳翻訳プログラム」には、現在6人の専任教員と10人以上の非常勤講師が携わっている。その多くが、塚本教授の古くからの通訳仲間で、中国語の各分野の現場を知るスタッフばかりだ。

通訳・翻訳をはじめ中国での駐在経験をもつビジネスコミュニケーションに精通するスタッフが揃っており、チームワークで指導に当たっている。北京外国語大学出身の李先生は、お茶の水女子大学で修士号を取得し、中国語通訳としても日本で活躍しているベテランだという。

▽"中国語漬け"

学生が使うテキストは、杏林大が独自に作成したもので、1コマ（90分間）の授業でちょうど一課が終わるように工夫されている。例えば一課の新出の単語は10個以下で、文法は平均2項目、われた頃に前出の単語が再び出てくる仕組みだ。

李先生は学生に対し頻繁に質問を投げかける。「这个字怎么念？（この字はどう読む）」「中文怎么说？（中国語でどう言えばよい）」

答えに窮した学生にはヒントを与え、再び考えさせる。学生が説明の意図を理解していないと感じた場合は日本語もまじえながら根気よく指導していた。

「妥協しない李先生の指導は、学生たちを粘り強くさせてくれる」（塚本教授）。

学生の食い入るような視線が印象的で、授業内容の充実さがうかがえた。

中国語学科の学生は最初の1年で基礎を固め、2年次には中国留学で実践感覚を磨く。

杏林大は現在、中国に10を超える協定校をもち、希望すれば必ず留学を経験できる。

帰国後の3年次は、中国語圏から編入してくる留学生と共に通訳・翻訳の実技、理論を学ぶ。4年次はそこにトッププロの指導が加わる。

こうした学習計画は、塚本教授の経験やノウハウに基づいてつくられている。"中国語漬け"の学習環境で、学生の中国語は確実に上達する。

▽大学院も併設

塚本教授は2007年に杏林大に教授として招かれ、09年には大学院に「日中通訳翻訳研究コース」を設置、長期的な計画の下で中国語通訳・翻訳の養成に力を注いでいる。

新学科の設置は「大学院への人材を学内で育てたい」というねらいがあるという。

真剣な表情の学生。充実さが感じられた。

杏林大学外国語学部中国語学科

［所在地］八王子キャンパス　東京都八王子市宮下町476　［定員］約30人

［条件］中国語学習経験は不問。既習者はレベルによってクラスを特設。

［問い合わせ］☎042-691-8613

「可能性は、大きい。人材は、多くない」

杏林大教授　塚本慶一

日本の大学では、全体的にコミュニケーション能力を高めるような授業が少ない。初歩の段階では「話させる」ではなく、「読んで分からせる」という感じ。だから、杏林大の教員にはもっと大胆さを求めている。学生に合わせてしまうと、レベルは上がらない。

学生には高いモチベーションを求めたい。中国という国はすごく魅力的で、日本との歴史的なつき合いも古い。とにかく中国に関心を持ち、好きになってほしい。「この国に賭けてみよう」という気持ちで中国語を学べば上達も早い。この先の中国語分野の可能性は大きいだろう。

日本で杏林大は「医学」の印象が強いが、最近の中国では「日本で唯一の通訳養成」という印象が浸透し「学生を編入させたい」という声も増えている。だから「中国語なら杏林大」という印象を早く日本でも定着させたいし、中国語通訳養成の動きをもっと日本全体に広げていきたい。

日中国交回復からもうすぐ40年になろうとしているのに、気がつけば中国語の人材は多くないし、育ってもいない、と感じている。

塚本教授

つかもと・けいいち　東京外国語大卒。通訳・翻訳の仕事で文化交流から政府間交渉まで幅広く活躍

「学んで考えが変わった。中国語通訳になりたい」

学習意欲にもえる、学生2人に聞く

中国語学習を始めた動機や現時点の目標などについて、黒岩謙太郎君と萩原妃美さんに話を聞いた。

◇

黒岩君はまだ中国へ行ったことがない。「最初は就職のため」と学び始めたが、入学後に考えが変わったという。いまは中国語通訳を目指している。

一方、萩原さんは発展を続ける中国を意識。「いま中国語を学んでおけば、絶対将来に役立つ」と考えたという。また、地元・山梨にも観光目的で多くの中国人が来ていると聞き、「地元に就職しても中国語を生かせるのでは」と考えている。

一日一課が進む学習ペースに負担はないという二人。黒岩君は自ら買った文法書で学んだり、ネット上で中国語字幕の付いた映像を探して見たりするなど授業以外でも励んでいる。

萩原さんは来年2月からの長期留学に向け、会話教室に通う予定だ。「先生に突然例文を作るよう言われ、正解した時はうれしい」（黒岩）、「先生と会話する時が楽しい」（萩原）。学習意欲にもえる二人だ。

近い目標は、もうじきに迫った中国語検定だという。萩原さんは4級に、黒岩君は3、4級のダブル受験に挑戦する予定だ。「加油吧！（がんばって）」

中国語通訳を目指す黒岩君（右）と来年2月に長期留学する萩原さん